

羅生門 速読問題①

学年（ ） 組（ ） 番号（ ） 名前（ ） 正答率（ ） / 2（ ）

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。
広い門の下には、この男のほかに誰もいない。ただ、所々丹塗りの剥げた、大きな円柱に、蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉鳥帽子が、もう二、三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。

なぜかと言うと、この二、三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか飢饉とかいう災いが続いて起こった。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。洛中が、その始末であるから、羅生門の修理などは、もとより誰も捨てて顧みる者がなかった。するとその荒れ果てたのをよいことにして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまいには、引き取り手のない死人を、この門へ持つて来て、棄てて行くという習慣さえてきた。そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪がって、この門の近所へは足踏みをしないことになってしまったのである。

その代わりまた鴉がどこからか、たくさん集まって来た。昼間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鷗尾の周りを鳴きながら、飛び回っている。殊に門の上の空が、夕焼けで赤くなる時には、それが胡麻をまいたようにはつきり見えた。鴉は、もちろん、門の上にある死人の肉を、ついでに來るのである。——もつとも今日は、刻限が遅いせいか、一羽も見えない。ただ、所々、崩れかかった、そうしてその崩れ目に長い草の生えた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついているのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬にできた、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待っていた。」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。だから「下人が雨やみを待っていた。」と言うよりも「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」と言う方が、適当である。その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下がりから降り出した雨は、いまだに上がる気色がない。そこで、下人は、何をしておいても差し当たり明日の暮らしをどうにかしようとして——いわばどうにもならないことを、どうにかしようとして、とりとめもない考えをたどりながら、さつきから朱雀大路に降る雨の音を、聞くともなく聞いていたのである。

問一 傍線部 A とは、どういうことか。最も適当なものを、次から選べ。 指示

- ア 天災によって都が破壊され、人々が住み着くような場所ではなくなったということ。
イ 世の中に信じられるものがなくなり、自分だけを頼りに生きる人々が増えたということ。
ウ 都は荒れ果てて、人々の心が荒み、何も信じるものがない状態になっているということ。
エ 不幸な出来事が重なりつつも、人々は何をしても生き抜こうと努力をしているということ。
オ 人々の心が荒廃して宗教観さえなくなり、洛中は狐狸や盗人が棲む場所になったということ。

問二 本文の表現についての説明として適当でないものを、次から一つ選べ。 表現

- ア 「蟋蟀が一匹とまっている」という表現によって、羅生門の誰もいないひっそりとした状況を印象づけている。
イ 「鴉」と「夕焼け」の描写は、色彩の対照を映像的に読者に想像させ、羅生門の不気味さを強調している。
ウ 「右の頬にできた、大きなきび」という外見の描写によって、下人が若い青年であることを暗示している。
エ 「四、五日前に暇を出された」と具体的な数字を出すことで、下人の逼迫した状況を鮮明に描いている。
オ 「Sentimentalisme」という語をあえて用いることで、下人が実は博学多才な人物であることを示唆している。

【 】

